

松村通信第75号

2011年1月15日
松村勝弘

自由に生きる？

前回、富山和彦氏に2010年11月27日(土)に経営学部校友会の経営学振興事業セミナーで東京でお話し頂く予定であると書いた。諸般の事情から、結局今日2011年1月15日(土)にお話し頂くことになった。私もそれを楽しみにしている。さて、今回は最近の雑感を書いておく。というか、ここのところ忙しくてじっくり本を読んでいる暇がない。また、色々嫌な仕事も多いものだから、最近の私の傾向として、そういうときに宗教に関連した、易しい本を読んで気を取り直すことが多い。易しい本で皆様にもお奨めなのが、「ひろさちや」という宗教評論家の本である。平易に書いてあるので読みやすい。

ひろさちや 紹介されているサイトにはこのように書いてある。「ひろさちや(1936年(昭和11年)7月27日～)は、日本の宗教評論家であり、多数の一般向けの解説書を執筆している。本名は増原 良彦(ますはら よしひこ)。大阪府に生まれ北野高校を経て、東京大学で印度哲学、仏教学を学び、気象大学で教鞭を執る。教員生活の傍ら、『ひろさちや』のペンネームで平易な言葉で多数の入門書を執筆し、一般の人々に仏教を身近な物として再認識させた。ペンネームの由来は、ギリシア語で愛するを意味する Philo(フィロ)と、サンスクリット語で真理を意味する satya(サティヤ)の造語である。本名名義での著書・訳書もある。」

ひろさちやの本で最初に読んだのは、[1]『もっと自由に生きるための「禅」入門』(三笠書房・知的生きかた文庫)だった。その後[2]『ひろさちやと読む歎異抄』(日本実業出版社NJセレクト)[3]『ひろさちやと読む般若心経』(同上、いずれも2010年)[4]『ひろさちやの「親鸞」を読む』(佼成出版社、2003年)を読んだ。

サンデル教授 実は、この正月ようやく落ち着いて「サンデル教授の政治哲学講義」を集中してビデオで見ることができた。話題の番組で、われわれMBAの講義方法の参考になるだけでなく、内容も改めて考えさせてくれるものだった。その中で話されているこ

とで、先の仏教書にも通ずるものがあると思った。

白熱教室 なお、サンデル教授の講義、いわゆる「白熱教室」については、様々なブログなどで紹介されている。その一つだけを紹介しておく。<http://deztec.jp/z/dw/j/>がそれだが、講義全体を概観するのに便利だと思う。そこで、サンデル教授の考え方が纏められているので紹介しておく。

「ロールズの主張は、所得と機会が偶然に基づいて分配されるのは不公正だ、という直感に根ざしています。生育環境の違い、持って生まれた才能の違い、才能と社会の需要の適合、などは偶然によるとロールズは考えます。リバタリアニズムが支持する自由市場も、義務教育制度などで機会の均等に配慮した能力主義も、十分に平等ではないのです。それゆえロールズは、分配の正義の基準を道徳的な対価とすることを批判し、公正な期待に基づく対価として整理します。

現代の先進諸国では、人々に特定の美德を押し付けるような法律は嫌われています。リベラリズムの概念が浸透しているのです。ならば難関大学への合格は、道徳的に賞賛されていないのでしょうか？ いいえ、現実には多くの人々が大学合格を誇りに思いますし、社会的にも道徳的な賞賛が与えられることが多いでしょう。

人々に特定の『よい生き方』を推奨する美德に根ざす正義には、長い歴史があります。紀元前4世紀の哲学者アリストテレスの『目的論』は、美德から正義を考える主張です。現実の幸福を実現する妨げとして功利主義に厳しく批判され、個人の選択の自由を侵害するものとして自由主義にも批判されました。しかし、現代においてもなお、人々の直感の中に美德は生きています。

道徳に關与する政治は、公正な社会の実現をより確実にする基盤になる、とサンデルは主張します。」

リベラリズム批判 サンデル教授はリベラリズムに懐疑的である。この講義の最初の方で功利主義について議論した後、リバタリアニズム、そしてそれから派生するであろう市場原理主義に批判的に講義をすすめている。なお、功利主義とリバタリアニズムの考え方

については具体例を挙げて解説しているので、先のプログから引用しておく。

米国の富の偏在
所得上位 10% が富の 70% を所有
功利主義者
所得の再分配は社会の効用を増加させるので「正しい」
リベタリアン
取得の正義と移転の正義を満たして築いた富を政府が強制的に再分配するのは「間違っている」

概念の相対化 サンデル教授はある意味で概念の絶対化を批判していると思う。学生たちに議論させて考えさせようとしている。とはいえ、共通善を目指すべきだともいう。

人間の認識の限界を意識しないと、傲慢に陥る。あるいは、自分の観念の虜になってものごとをありのままに見なくなる。「選択の自由」といっても本当にそうなのか、疑問無しとしない。選択をする人間の目が曇っていれば、また人目を気にした決定であったりすれば、その選択・決定は自由ではあり得ない。仏教書の中にそういう反省をさせてくれる箇所を発見できる。色々読んだりテレビを見たりしていると、現代社会が洋の東西を問わず問題として感じていることが浮き彫りになるように思う。

ひろさちやに戻ろう。[1]『もっと自由に生きるための「禅」入門』でこう言っている。「宗教を持たない日本人は、未来が人間の思うままになると考えています。高度経済成長時代というのは、まさに経済を人間の計画のままに動かそうとした時代だったのです。だから日本人は、未来が読めなくなるとあわてふためきます。なんとかして未来を読もうと必至になります。にもかかわらず未来が読めないから、怯えてしまうのです。」ひろさちやは明日のことなど思い悩むなど言いません。でも日本人は未来に理想・目標を設定し、その実現に向けて努力すべきである。こういう努力、努力が好きだと言います。しかし努力には二つある。「一つは、他人を意識してなされる努力。もう一つは、他人を意識しないでなされる努力/です。」そこで、こういう中国の寓話が紹介されている。

役に立つ人間とは?「ある男が士官しようとして、そのときの皇帝は学問のできる人間を採用されるからというので、賢明に学問をやります。やがて採用の兆しが見えてきたこ

ろ、皇帝が死にます。即位した次の皇帝は武人を採用します。それで男は、今度は武術を習います。やがて採用されそうになるのですが、またしても皇帝が死にます。次の皇帝は年寄りを嫌い、若者を採用します。それで彼は、仕官できなかった」こういう話を紹介している。だから「世の中のためになる人間になれと教えているのは愚かなこと」だというわけだ。人間は機能価値ではかられるものではなく、人間には存在価値がある、という。世間の物差しでものごとを判断するから右往左往しなければならないわけだ。

声が大きくて元気がよくて 私自身、元アサヒビール会長の樋口氏の言葉に依って、学生諸君に就職活動では「声が大きくて、元気がよくて、ちょっぴり知性のある」人間が求められていると、常々いっている。また、就職活動は自分を売り込むというある種の営業活動なのだから、「声が大きくて云々」は営業活動としては当然必要なことだとも話している。自分を売り込みに行く。その売り込むに足る人間として自信を持てる自己を鍛えることが先決だとも思っている。それは社会に役立つということだけではなく、自分が納得できる人生を送るためにも自分を鍛えなければならないと思っている。世間の物差しによるのではなく、信念を持った自律的な決定をして欲しいと願っている。

他力本願 ただし、それでザッツ・オーライではなく、所詮人間社会だから、自力には限界がある。だからこそ、他力本願という親鸞の言葉が重い。「めくら千人、めあき千人」とは、私の恩師河合信雄教授の言葉だ。シコシコとやっておれば、いまは誰も分かってくれなくても、いずれ誰かが分かってくれるものだ、という意味だ。先の中国の寓話でいえば、役に立つために修行するのではなく、まず自力で何かをしていけば、いずれ認められるときもある。認められなくてもそれは構わない。自分が選んだ道だから。そう思う必要があると、私は思っている。

なお、サンデル教授の講義で「選択の自由」に関わって、様々な議論が行われていたが、自由に関してはさらに次の機会に論じたい。

HPを見て下さい。又何でも意見を。
皆様のご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>)も
ご覧下さい。また、メールで意見交換しまし
ょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。